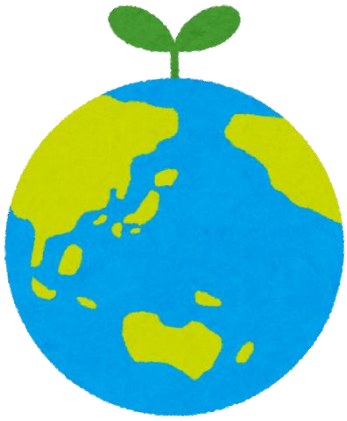
第３８回（令和７年度）

「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」

入 選 作 品 集



令和７年１２月

公益財団法人小佐野記念財団

最　優　秀　賞

中学生の部　最優秀賞

「言葉は通じなくても心は通じる」

中央市立田富中学校　1年　郷田　愛子

小学生の時、ブラジルから転校生が来た。明るい笑顔の女の子だったが、日本語があまり話せないようでクラスメイトもどう話しかけたらいいか戸惑っていた。そこでクラスのみんなでポルトガル語で書いた自己紹介カードを用意してわたした。カードにはそれぞれの名前や好きな事が書かれていて、転校生もとても嬉しそうだった。私はポルトガル語のあいさつを少しだけ知っていたので声をかけてみた。するとその転校生はびっくりした後にっこり笑って嬉しそうにうなずいてくれた。その笑顔を見て「あ、通じたんだ！」と私も嬉しくなった。それからもっと仲良くなりたくて、パソコンの翻訳アプリを使って転校生に見せた。転校生もパソコンの翻訳アプリを使って私に伝えてくれた。上手く伝わらないこともあったが、お互いに工夫しながら話すうちに少しずつ会話ができるようになり笑顔が増えた。私が一番おどろいたのは、言葉が通じなくてもジェスチャーや表情だけで気持ちが伝わるということだ。例えばそれでいいよと伝える時には笑って親指をたてたり、別れる時は手をふるだけでちゃんと通じるのだ。言葉よりも伝えたい、わかりたい、という気持ちが大切なのだと感じた。休み時間には、日本の手遊びやだるまさんが転んだなどを紹介した。転校生は最初は戸惑いながらもすぐにルールを覚えて楽しんでくれた。代わりにブラジルで人気な遊びや歌を教えてくれて一緒に楽しむことができた。教室の中がまるで小さな国際交流の場のようだった。

中学生になってからも地域にはたくさんのブラジル出身の人達がいた。日常の中でふれ合ううちに、ポルトガル語のあいさつや習慣、食べ物などブラジルの文化をもっと知ることができた。日本とは違う考え方や生活を知ることで、文化を理解する事の大切さも学べた。

この体験を通して私は国際交流は特別なイベントや海外旅行だけのことではなく、すぐ身近にあるものだと気づいた。文化や言葉の違いを知ろうとすること。そしてお互いに気持ちを伝え合い、理解しようとする心があれば、交流は自然と生まれるのだと思う。最近ではニュースで戦争が続いている国の事を知った。そこでは、私と同じぐらいの年の子ども達が安全に学校に通う事ができず、苦しい生活をしているそうだ。そのことを知って「自分にできる事はないだろうか」と考えるようになった。私はぼ金活動を通して少しでも力になれたらとぼ金活動に協力するようになった。小学生の時からブラジルの人達と関わったことで、私は世界はつながっていると実感するようになった。言葉や文化が違っても気持ちは伝わるし思いやりの心は世界共通だ。これからも私は色々な国の人と出会い、お互いの違いを知って認め合えるような国際交流をしていきたい。たとえ言葉が通じなくても心はきっと通じ合えると信じている。

優　　秀　　賞

中学生の部　優秀賞

「国際社会への第一歩」

北杜市立甲陵中学校　2年　春日　さくら

私は小学六年生のとき、言語の違いによって、国際的なコミュニケーションの難しさを知った。

私が小学六年生になるとき、転校生が来た。どんな人だろうとワクワクしながら待っていると、すらっとしたきれいな女の子が教室に入ってきた。彼女が自己紹介を始めると、私たちはあ然としてしまった。なぜなら、彼女が英語で自己紹介を始めたからだ。きっと聞いていたクラスメイトも、海外の人と関われるワクワク感と、ちゃんと仲良くなれるだろうかという心配を感じていただろう。私もその一人だった。

ホームルームが終わると一斉にみんなが彼女の周りに集り、話しかけていた。どうやら、彼女は日本語がまったく話せないらしい。それでも私達は「OK」や「GOOD」などの簡単ではあるが、英語で彼女に話しかけ、コミュニケーションをとろうと試みていた。

しかし、一か月ほど時が経つと彼女の周りに人が集まらなくなっていった。きっと、転校してきたばかりのときの興奮が冷めてきていたのだろう。さらに言語がつながらないとコミュニケーションがとれなくて、私たちもどうしたらいいか分からなくなっていた。結局、あまり仲良くならないまま、卒業してしまった。

私は今でも、彼女にもっとたくさん話しかけておけば良かったと後悔している。あの時、もう少し話しかけていれば、自ら英語を学び、少しでもコミュニケーションがとれていれば、彼女を一人にせずに仲良くなれていたかもしれない。

これからの社会で国際交流は欠かせないものとなっていくだろう。国境の壁を超えてコミュニケーションをとっていくことがますます重要視されていくはずだ。そんな社会で大切だと思うことは、基本的な英語能力とコミュニケーションを取ろうとする勇気だ。海外の人にも話しかけられる勇気があればたとたどしい英語であっても、コミュニケーションがとれると思う。ただ、最低限の英語能力は必要だ。この2つが、海外からの転校生との体験を通して、必要だと感じたことだ。

私は言語の壁を感じてから、英語の大切さを思い知った。世界の多くの人が使える英語を学ぶことはとても大切なことだと思う。だから私は、これからも英語の勉強にはげんでいきたい。そして、話しかける勇気も大切にしていきたい。これが国際社会への第一歩だと思っている。

「差別や偏見のない社会へ」

北杜市立甲陵中学校　3年　吉村　佳湊

去年の冬、私たちのクラスに、中国の学生と英語での交流授業をすることになったと知らせが入った。受験シーズンということもあり、どこの中学校からも断られていたらしい。このとき私は、外国人と交流できることへの高揚感と、少しの恐怖を感じていた。英語でのコミュニケーションに対する不安と、相手が「中国人」ということに対してだ。当時の私は、中国人に対して、怖くて迷惑なことばかりするという偏見を心のどこかで持っていたのだと思う。

そして迎えた当日。私のグループは日本の良いところの紹介と折り紙を教えることになっていた。「ちゃんと話を聞いてくれるかな」という私の不安とは裏腹に、中国の学生たちはつたない英語を熱心に理解しようとしてくれ、折り紙も楽しそうに折ってくれた。

このとき、私はハッとした。自分は目の前にいる人達を人種というフィルターで見ていたのだ。迷惑な行動をするごく一部の人、中国政府の強硬な政治の報道、これだけで「中国人はみんなこうだ」と決めつけていた。自分の浅はかな考えに恥ずかしくなった。そして、人に人種や民族という大きなくくりで偏見を持ってはいけないと学んだ。しかし、悲しいことにも世界にはこのような偏見があふれていると思う。

例えば黒人差別。これは奴隷制度から始まり、アメリカでは現在も度々事件が起きている。中国ではウイグル族への弾圧が問題となっていた。なぜこのような差別、偏見が起こるのか私なりに考えた。それは、「無知」と「恐れ」によると思う。

私たちは、自分と違う見た目や言葉、文化を持つ人たちと出会ったとき、無意識のうちに距離を感じたり、警戒したりしてしまうことがある。それは決して悪意からではなく、ただ「知らない」ことによる不安や戸惑いなのだと思う。人は、本能的に「よく知らないもの」も対して恐れを感じやすい。

その恐れが、「なんとなく怖い」「近づきたくない」といった気持ちにつながり、それが偏見となって心に染みついてしまう。やがてその偏見が行動に現れたとき、それは差別という形になり、相手を傷つけてしまうことになると考える。

しかし、差別は生まれつきの感情ではない。周囲の言葉や、社会の空気、知らないままの情報によって育っていくものだ。だからこそ私たちは変わることができる。他文化の人たちとたくさん接し、コミュニケーションを取り、お互いを知ろうとすることが大切だと考える。世界中の人々がさかんにコミュニケーションを取ることで、差別や偏見のない世の中になってほしいと私は強く願う。

佳　　作

中学生の部　佳作

「国をこえて広がるつながり」

山梨英和中学校　3年　北野　鈴奈

私は今年の三月にタイのメーコックファームを訪れました。慣れない環境や文化の違いに最初は不安や戸惑いがありましたが、その中で深く心に残ったのは子どもたちとの出会いです。

最初は言葉が通じないことにどう接したらよいか迷いました。しかし、一緒に遊んだり笑い合ったりしているうちに自然と心が通じ合うようになりました。特に印象的だったのは、子どもたちが私たちの名前をノートに書き留め、大切に覚えようとしてくれていた姿です。そのまなざしには出会いを大切にしたいという強い思いがあふれていて、私はとても心を打たれました。

日本での生活の中では人との出会いをあたり前に思ってしまいがちです。しかし、タイの子どもたちに出会ったことで一人ひとりのつながりをもっと大切にしようという気持ちになりました。言葉が通じなくても相手を思う気持ちや笑顔は必ず伝わることも学びました。国際交流は、文化や言葉の違いを越えて心がつながる体験だと実感しました。

また、この経験は私の生き方や考え方にも大きな影響を与えてくれました。知らない場所での生活を乗り越えたことで自分に少し自信がつきました。そして子どもたちとの交流を通じて人を思いやる気持ちの大切さを改めて感じました。私はこれからもっと多くの人と出会い、その一つ一つを大切にしていきたいと思います。そしてどんな小さなことでも自分にできることを探しながら、人の役に立てる存在でありたいです。

今回の体験を通じて、国際交流や国際理解とはただ外国を訪れて文化の違いを知ることだけではないと分かりました。相手の思いを知ろうとする気持ちや、自分の心を開いて向き合う姿勢こそが大切なのだと思います。違いをこえて初めて分かり合えることがあり、その中で得られるつながりは一生の宝物になるはずです。私はこれからも、タイで学んだ心を通わせる力を忘れずに国際社会の一員として平和で温かいつながりを広げていきたいです。

「国際交流の素晴らしさについて」

田富中学校　1年　嶋田　このみ

皆さんは、国際交流と聞いてどんなものを思い浮かべるでしょうか。私は、最初に国際交流と聞いて姉妹都市を思い浮かべました。姉妹都市とは、文化交流や親善を目的として二つの都市で結ばれる提携のことです。私の住む山梨県は、アメリカのアイオワ州や中国の四川省など六つの地域が姉妹都市として認められています。そんな国際交流の関係性について紹介したいと思います。

姉妹都市は、様々な理由で結ばれます。例えばアイオワ州の場合台風の被害を受けた際に農畜産物が贈られたことがきっかけで姉妹都市として結ばれました。他にも、その国の政府訪問や民間交流などを通して結ばれることが多いです。このことについて、姉妹都市として結ばれることでお互いに信頼を得られることができると感じました。お互いのことを深く知ることができればいざとなった時に助け合うことができます。

また、私は小さい頃からずっと英会話教室に通っており、外国の人との交流が豊富です。

その経験を生かして将来は外国系の仕事に興味があります。私が通っている英会話教室では授業の一環で外国のことを学ぶ機会があります。例えばメキシコやインドなどの食や生活の文化を知り、日本との違いを考えたりします。その教室では、アメリカ、イギリス、フィリピンなど日常的に英語を使う出身の先生がおり、その先生たちとの英語を使った実践的なゲームなどを行ったりすることで、自然に英会話が身につきました。また、この英語の学習を生かして難しいことにチャレンジしたいという気持ちが芽生え英検にもチャレンジすることができ、今は準二級取得に向けて勉強に励んでいます。このような経験は将来にも役立つと考えています。

更に国際交流を深めていくには、どうすれば良いでしょうか。私が考えた一つの案として、リモートなどで日本と他の国をつなげて会話をしてみることです。これまではあまりそのような経験が多くはありませんでしたが、国同士での交流を深めていくためにはお互いの国のことを伝え合うことが大切だと思います。そのためにも自分たちの国の魅力を伝え合って文化交流をしてみるのも一つの手だと思います。お互い文化を知るだけではなく、その国の言葉を覚えることもできるので一石二鳥だと思います。国同士の対談が世界を知る一つの手段になるのではないでしょうか。

このように、国ごとの違いを認め合うことで世界はもっとつながっていけると思います。これをきっかけに更に国のことを知ることができたら国際社会への発展に大きくつながると考えます。

「尊重と理解」

北杜市立甲陵中学校　3年　杉本　侑里佳

　中学二年生の夏のこと。私はフランス語を学び始めた。
「どうしてフランス語？」
「何の意味があるの？」
と疑問を投げかけられた。確かに、フランス語が将来どのように役立つのかは分からなかった。最初は漠然とした興味だけで続けていた。しかし、今でもフランス語を学び続けている理由は、異文化をもっと知りたいという好奇心に他ならない。
　その年の秋、私たちは修学旅行で京都や奈良を訪れた。その時、担任の先生から「日本に来た外国人観光客に声をかけてみよう」という課題が出された。私は英語に自信がなく、不安な気持ちでいっぱいだった。周りの友達も同じだったが、勇気を出して外国人に声をかけることに決めた。
　清水寺で声をかけたのは、フランス人の二人組。背の高い男性と、茶髪の綺麗な女性だ。私たちがぎこちない英語で話していても、彼らは優しく対応してくれた。その時、私は勉強していたフランス語を使うことはできなかったが、何だか親近感を感じ、もっと知りたいという気持ちでいっぱいになった。その時、言葉だけでなく、心を通わせようとする姿勢こそが何よりも大切だと感じた。
　この経験を通して、私は一つの大切なことに気づいた。
　それは、文化が違っていても、どこかでお互いに興味を持ち、理解し合おうとする気持ちが重要だということだ。私はもっと広い世界のことを知りたくてフランス語を学んでいる。また、あの時会ったフランス人の二人もきっと日本のことに興味を持ってくれて、フランスからはるばる日本の京都に来てくれたのだろう。お互いのことを知りたいという気持ちが、私たちとフランス人の方との出会いに繋がった。最近、世界中で戦争や対立が続いていることを考えると、異文化交流の重要性がますます感じられる。
　私の将来やりたいことの一つに、世界一周旅行がある。自分の足で世界中を訪れ、現地の人々と直接触れ合い、その土地の文化を学ぶことで、さらに深い理解を得たい。強くそう思っている。その時にはフランス語も使って、フランスに住む人と会話をしてみたい。その時まで、私のフランス語の勉強は続いていく。
　「国際協力」「国際理解」なんてものは、私にとって関係のないものだと思っていた。しかし、あのときの観光客の方との会話を通して急に身近に感じた。私たちには何か大きな行動はできないかもしれない。でも、それは裏を返せば小さな行動でもできることがあるということだ。私たち一人ひとりが、お互いの文化を尊重し、理解し合おうとする気持ちを大切にしていけば、きっと世界はもっと素晴らしい場所になるはずだ。それが、私たちが作るべき未来であり、国際協力の第一歩なのだ。

第３８回（令和７年度）
「国際交流・国際理解のための小中学生による作文コンクール」
優　秀　作　品　集

令和７年１２月　発行

発行者：公益財団法人小佐野記念財団
山梨県甲府市丸の内一丁目６－１
（山梨県　新価値・地域創造推進局国際戦略・自然首都圏推進課内）
TEL055(223)1435